

「妊産婦・乳幼児に対する支援のポイント」

～避難所運営者・支援者向け～



妊産婦や乳幼児には、
その特性に合わせた配慮が必要です。

このポイント集は、地域版避難所運営マニュアルを補足するものとして、
妊産婦や乳幼児の特性に合わせた、
具体的な配慮の方法をまとめています。

※ このポイント集は、以下のような内容になっています。必要部分を取り出して、ご活用ください。

母子を守るための普及啓発 ～自助のすすめ～	1 ページ (表紙裏 1 枚)
避難所での配慮～妊産婦編	2 ページ (1 枚)
避難所での配慮～乳幼児編	4 ページ (2 枚)
質問票 (例)	1 ページ (1 枚)

仙 台 市

母子を守るための普及啓発 ～自助のすすめ～

避難所での配慮はもちろん大切ですが、最も重要なことは、被害を最小限におさえ、自分の身や子どもの安全を守るための日ごろからの備えです。

妊産婦や乳幼児を抱えた保護者は、どんな備えが必要なのか、助けが必要になったときに誰に助けを求めたらいいのか、考えておく必要があります。そのため、防災訓練や町内会での広報などを活用しながら、日ごろからの備えを啓発していきましょう。

■ 地域で積極的に啓発しましょう① ～「助けてほしい」と声をあげることの重要性～

誰が「助けてほしい」と思っているのか、誰にどんな支援が必要なのか、多くの人で混み合う避難所では、分かりにくくなります。

支援者がアンテナを高くし、声をあげやすい環境づくりを行うことが大切です。

特に、妊産婦や乳幼児を抱える家庭は、遠慮して声をあげないことが多いので、日ごろから『困ったことがあったらぜひ声をかけて』と働きかけていきましょう。



■ 地域で積極的に啓発しましょう② ～日ごろから備えておきたいポイント～

● 家具の固定、照明の落下防止、窓ガラスの飛散防止、生活水の確保

風呂に水を溜める場合には、幼い子どもが浴槽に落ちる事故の危険性もあるので、風呂場の扉に鍵をかけるなどの配慮が必要です。

● 備蓄、避難するときに持ち出す物の用意

母子健康手帳は妊娠経過や子どもの成長過程・予防接種などの状況がわかるので非常に便利です。

乳幼児用品やアレルギー対応のミルク・食物は、支援が届きにくいので、意識して用意しておくよう日ごろから声かけしておくことが大切です。

● 避難場所、避難経路の確認

● 安否確認のための伝言の方法

● 地域の防災訓練への参加の呼びかけ

● 保育所や幼稚園・児童館等との連絡方法、協力してもらえる内容についての確認 など



トピックス 災害時の辛い経験

東日本大震災の際、次のような困難な状況に陥った方が実際にいました。

- ・母乳で育てていたが、震災のショックで出なくなった。
- ・オムツの買い置きがあまりなく、足りなくなって困った。
- ・赤ちゃんを沐浴をさせてあげられなかった。オムツかぶれが大変だった。
- ・妊娠していたが、横になることができず、おなかが張ってしまって心配だった。
- ・暖房がなかったので、生まれたばかりの我が子を毛布でくるんで防寒したり、カイロで温めたりした。
- ・避難所で、赤ちゃんが泣いている声に対し、周りの人がぶつぶつと文句を言っていた。



避難所での配慮～妊産婦編～



■ わかってほしい、妊産婦の状況

「つわりがひどいけど、大勢がいる中ではおう吐できない」「ストレスでおなか
が張ってしまう」「妊娠中はトイレが近い」「同じ姿勢で座るのが辛い」「食べ物
に制限がある」など

1 避難スペースの配慮

- ・妊産婦には横になって安心・安静に過ごせる場所を

■ 妊産婦が過ごすスペースづくりのポイント

- ・畳の部屋が望ましいですが、難しい場合はござやカーペット、断熱マット、新聞紙や毛布などを床に敷いたりして工夫しましょう。
- ・妊産婦が横になったり座ったりできる広さを確保しましょう。
- ・目隠しがあり、女性が着替えたり、身体を清潔にできるスペースを確保しましょう。

■ 妊産婦どうし、そして家族単位で場所を確保し、助け合える環境づくり

最初に場所を決めるときが肝心。以下のポイントに留意して、世帯の場所を決めましょう。

- ・妊産婦や乳幼児のいる世帯など、状況の近い人をまとめると、連帯感と安心感を確保できます。
- ・家族単位で一緒に過ごせるようにすると、家族内で助け合い支え合うことができます。
- ・できれば、妊産婦のいる世帯には、別の部屋を確保しましょう。難しい場合は、避難スペースを仕切りで区切るなどの工夫をしましょう。



2 避難生活における配慮

- ・マタニティマークや、地域での要援護者のマークの活用などにより、配慮が必要であることが周囲の人に伝わる工夫を
- ・女性が話しやすいように、女性が聞き取ってニーズを把握
- ・妊娠初期は見た目ではわからないため、遠慮なく申し出てもらえるように配慮

■ 生活ルールの工夫

- ・妊産婦や乳幼児が過ごすスペースにマタニティマークや地域で決めた要援護者マークを掲示するなど、配慮が必要な存在であることがひとめでわかるように工夫しましょう。
- ・物資の配給やトイレの使い方など、配慮が必要な生活ルールを決め、全員がわかるようにはっきり明示しましょう。



■ ニーズ把握のための質問

妊娠週数・心身状態（既往症・つわり・腹部のはり・医療ニーズなど）

生活上の配慮の要否（安静・トイレ・食事・床の冷え対策など）

※ 別紙の質問票（例）も参照ください。

3 妊産婦に対する支援物資の確保

- ・女性が話しやすいように、女性が聞き取ってニーズを把握
- ・公の備蓄や支援には限界があるため、個別の事情で必要になるものは、その内容を行政に伝える
- ・自宅から持っていく（自助）・みんなで持ち寄る（共助）ことも呼びかけ、必要なものを確実に確保

■ 公に備蓄されているもの

市役所の担当者を通して、必要なものの調達を依頼します。

- ・毛布：市立学校とコミュニティ防災センターに備蓄されています。
 - ・生理用ナプキン：流通在庫備蓄*されています。（約 42,000 枚）
- *市が購入した製品を企業の流通ルートに乗せることにより、企業の倉庫に備蓄しています。

■ 体調を崩したときの備え

妊産婦に必要なものは、基本的には他の大人と同じですが、体調を崩したときなどに備えて、以下のものがあると助かります。

- ・生理用ナプキン
- ・体を温めるもの（毛布・携帯カイロなど）

トピックス

周産期福祉避難所

地域の避難所での生活が困難な妊産婦がいた場合、安心して避難生活を送れるよう、福祉避難所への受入れについて区災害対策本部と調整しましょう。

再開した医療機関と診療科目の周知

地域で再開した医療機関と診療科目は、妊産婦・乳幼児だけでなく避難所全体で有効な情報です。情報を把握したら掲示板などで随時知らせましょう。



防寒対策あれこれ

- ・靴下・マフラー・手袋（軍手）など、体温が奪われやすい体の末端部を保温すると効果的です。
- ・携帯カイロも便利です。ペットボトルにお湯を入れタオルで巻けば即席湯たんぽになります。（お湯の入れすぎに注意）

避暑対策あれこれ

- ・うちわ、凍らせずに使える保冷剤、ウエットティッシュなどを利用しましょう。
- ・風通しを良くするときは、蚊などに刺されないよう、虫よけ対策も必要です。
- ・妊産婦は脱水症状を起こしやすいので、こまめに水分を補給するよう呼びかけましょう。

避難所での配慮～乳幼児編～



■ 気づいてあげたい「乳児」を抱えた親の思い

「夜泣きがひどくて周りに気を使ってしまう」「母乳をあげたいけど周りの目が気になる」「おむつ替えのときに匂いなど迷惑にならないか気になる」「ストレスで母乳が止まってしまった」…など

■ 気づいてあげたい「幼児」を抱えた親の遠慮

「子どもが泣いたり、大声をあげたりしてしまう」
「思い切り体を動かして遊ばせたいけれど、騒いでは迷惑」…など

1 避難スペースの配慮

- ・乳幼児が泣いたり騒いだりしても大丈夫な場所、落ち着いて授乳でき、おむつ替えが気兼ねなくできる場所の確保

■ 乳幼児親子が過ごすスペースづくりのポイント

- ・畳の部屋が望ましいですが、難しい場合はござやカーペット、断熱マット、毛布を床に敷くなどの工夫をしましょう。
- ・子どもを寝かせたり、ハイハイさせたり、おむつを替えたりできるスペースを確保しましょう。



■ 乳幼児親子どうし、そして家族単位で場所を確保し、助け合える環境づくり

最初に場所を決めるときが肝心。以下のポイントに留意して、世帯の場所を決めましょう。

- ・妊産婦や乳幼児のいる世帯など、状況の近い人をまとめると、連帯感と安心を確保できます。
- ・家族単位で一緒に過ごせるようにすると、家族内で助け合い支え合うことができます。
- ・できれば、乳幼児のいる世帯には別の部屋を確保しましょう。難しい場合は、避難スペースを仕切りで区切るなどの工夫をしましょう。

2 避難生活における配慮

- ・地域での要援護者のマークの活用などにより、配慮が必要であることが周囲の人に伝わる工夫を
- ・保護者が話しやすいように、同性が聞き取ってニーズを把握

■ 生活ルールの工夫

- ・妊産婦や乳幼児が過ごすスペースにマタニティマークや地域で決めた要援護者マークを掲示するなど、配慮が必要な存在であることがひとめでわかるように工夫しましょう。
- ・物資の配給やトイレの使い方など、配慮が必要な生活ルールを決め、全員がわかるようにはっきり明示しましょう。

■ ニーズ把握のための質問

- ・乳幼児の月齢・性別・身体状態（アトピー・喘息などの既往症・医療ニーズ）
 - ・母親の状態
 - ・生活上の配慮点（ほ乳・離乳の別、おむつ・アレルギー）
 - ・離乳食の進み具合
- ※別紙の質問票(例)も参照ください。



■ 感染症の予防

- ・閉じられた場所に大勢で暮らすことになる避難所では、インフルエンザやノロウイルスなど感染症の流行に注意しましょう。
- ・うがい、手洗いを徹底しましょう。うがいをするのは水でもお茶でも良いです。出入口付近に、手をひたせる消毒液を用意するなど、ウイルス等を持ち込まない工夫をしましょう。
- ・おむつ等汚物の廃棄場所を決めましょう。廃棄されたものは手袋・マスクなどを装備して処理しましょう。吐いたり、下痢をしたりする子のおむつ替えは、別室で対応できると良いでしょう。
- ・定期的に避難スペースの換気をしましょう。

3 乳幼児のいる世帯に対する支援物資の確保

- ・保護者が話しやすいように、同性が聞き取ってニーズを把握
- ・公の備蓄や支援には限界があるため、個別の事情で必要になるものは、その内容を行政に伝える
- ・自宅から持っていく(自助)・みんなで持ち寄る(共助)ことも呼びかけ、必要なものを確実に確保

■ 公に備蓄されているもの

市役所の担当者を通して、必要なものの調達を依頼します。

- ・毛布：市立学校とコミュニティ防災センターに備蓄されています。
 - ・おむつ：流通在庫備蓄*されています。(子ども用 約 26,000 枚)
 - ・おしりふき：流通在庫備蓄*されています。(約 118,000 枚)
 - ・生理用ナプキン：流通在庫備蓄*されています。(約 42,000 枚)
 - ・ミルク：各区役所・総合支所に備蓄されています。(約 150,000 g = 約 1,000 人の2日分)
 - ・哺乳瓶：各区役所・総合支所に備蓄されています。(約 1,500 本)
- *市が購入した製品を企業の流通ルートに乗せることにより、企業の倉庫に備蓄しています。

■ 乳幼児にあったらいいもの

おむつ、おしりふき、ミルク・哺乳瓶（必要な方）、離乳食、ウエットティッシュ、ティッシュペーパーまたはトイレトペーパー、タオル、毛布、だっこひも、母乳パッド、使用済みおむつを入れるビニール袋…など

■ 気を付けたい、ミルクをつくる時の水

- ・外国産のミネラル水など硬度の高い水は、赤ちゃんの腎臓に負担がかかり、消化不良を引き起こすおそれがあります。水道水を利用できないときは、国産のミネラル水を利用しましょう。

■ アレルギー疾患の配慮が必要な場合には、自助・共助による確保が重要

- ・子どもによってアレルゲン（アレルギー症状を引き起こす原因となるもの）は異なるので、保護者が備蓄しているものをできるだけ持参するよう働きかけることが重要です。
- ・同じアレルギー疾患を持つ世帯どうしの共助による調達も考慮しましょう。
- ・外部からの支援が確実に届くように、行政の窓口やラジオ・インターネットなどを通じて支援団体（企業やNPO法人など）に情報を届けましょう。



再開した医療機関と診療科目の周知

地域で再開した医療機関と診療科目は、妊産婦・乳幼児だけではなく避難所全体で有効な情報です。情報を把握したら掲示板などで随時知らせましょう。



防寒対策あれこれ

- ・靴下・マフラー・手袋（軍手）など、体温を放出しやすい体の末端部を保温すると効果的です。
- ・携帯カイロも便利です。ペットボトルにお湯を入れタオルで巻けば即席湯たんぽになります。（お湯の入れすぎに注意）
- ・緊急用保温毛布（銀色のシート状のもの）は、体温調節機能の未熟な乳幼児には使用しないようにしましょう。

避暑対策あれこれ

- ・うちわ、凍らせずに使える保冷剤、ウエットティッシュなどを利用しましょう。
- ・冷却シートを乳幼児に使う場合は、シートが額からずれて鼻と口をおおって窒息しないように気をつけましょう。
- ・風通しを良くするときは、蚊などに刺されないよう、虫よけ対策も必要です。
- ・乳幼児は脱水症状を起こしやすいので、こまめに水分を補給するよう呼びかけましょう。

哺乳瓶の消毒

- ・哺乳瓶専用消毒剤がない場合は、煮沸による加熱、ノロウイルス対策として使用される塩素系漂白剤（※）の利用などで対応しましょう。電気が復旧したら電子レンジの加熱でも大丈夫です。

（※）目安：使用濃度は0.01～0.0125%

塩素系漂白剤5%のもので0.01%の希釈液を作る場合原液5ml（ペットボトルキャップ1杯）に水2.5L



代替品の活用

- ・哺乳瓶がない場合、紙コップやガーゼ、スプーンなどを利用して授乳することができます。
- ・乳児には、毛布は重く窒息する場合がありますので、タオルを使用しましょう。
- ・汚れをふきとったり、毛布代わりにしたり、タオルは様々な用途に使えます。公の備蓄にはタオルが含まれていないので、避難所に持っていくものの中にタオルを入れるなどの備えも重要です。



子どもの育ちやこころの安定には、思い切り遊ぶことが必要

- ・乳幼児は、泣いたり、大きな声を出して体をいっぱい動かして遊びながら育っていきます。精神的なストレスにつながらないように、こうした行動を無理に妨げないことが重要です。
- ・子どもが思い切り体を動かしても迷惑にならないスペースの確保や、夜泣きしたらそっと外に出られる動線の配慮が有効です。



別紙（聞き取りにより作成するか、又は渡して書いてもらうことを想定しています。）

妊産婦・乳幼児質問票（例）

1. 現在避難しているご家族の方を教えてください。

お名前	生年月日	続柄	健康状態（妊娠中の方は出産予定日）

2. ご住所

3. 現在の避難生活において、ご自身やご家族のことで心配なことはありますか？

ない ・ ある

→ 誰の、どのようなことですか？

→ 心配なご家族の名前や年齢を教えてください。

お名前

年齢

お名前

年齢

4. 今、お困りのものはありますか？

【食品・調乳関係】 水・粉ミルク・アレルギー用ミルク・離乳食・アレルギー対応離乳食
哺乳瓶・哺乳瓶消毒剤

【衛生用品】 下着（女性用 子ども用）・生理用ナプキン・清浄綿・中身の見えないごみ袋
おしりふき ・ 紙おむつ ・ ビニール袋（おむつ廃棄用）

【その他】 おんぶ（抱っこ）ひも ・ 携帯カイロ等の暖房具 ・ タオル ・ 毛布

5. その他、不自由なことやお困りのことがありましたらご記入ください。

避難所名

担当者名

困った時はいつでも声をかけてください。

各地域の取り組み ～女性が中心になって作った防災宣言【岩切地区】～

【岩切・女性たちの防災宣言】

平成22年6月12日に、「岩切・女性たちの防災宣言」を発表しました。昼間に大地震が起きたら、家にいるのは女性が多い。ならば女性の視点で宣言をつくれれば、防災対策として意味が深まるとの提案を受け、年代や立場を超えた女性たち約20人が集まって、ワークショップを通じて地域と防災についての思いを語ってもらい、問題点を整理し、宣言づくりを行いました。

しかし、震災を経て、地域や防災に対する思いが変わりました。今の思いを反映した新しい防災宣言が必要だと考え、再びワークショップを地域で開催し、新しく「岩切・女性たちの防災宣言2015」を発表しました。

防災宣言は、地域に住む女性たちの心の支え（基本）であり、母親たちへ「子どもたちが安心してすごせる岩切」を一緒に考えようと声かけするツールでもあります。



▲岩切・女性たちの防災宣言2015

【防災訓練時の工夫】

地域の防災訓練で親子連れが来たときには、「この顔を覚えていてね、何かあったら声をかけてね」と積極的に声をかけるようにしています。

お互いに顔を覚えることによって、非常時にお互い声をかけやすくなるからです。

また、非常時に自分にできることとできないことを見極める場として防災訓練を活用してほしいと考えています。

たとえば、毛布をタンカ代わりにして怪我をした人を運ぶという訓練内容のとき、「昼間いるのはわたしたちだから」と高齢の女性たちが運ぼうとチャレンジしましたが、握力が弱く、運ぶことができませんでした。

地域の中で、何ができて何ができないのか見極めるためにも、そして適切な役割分担を進めるためにも、必要なことだと思います。

【地域の防災活動に女性が積極的に参加】

岩切には、仙台地域防災リーダーが5人いますが、そのうち4人が女性です。町内会でもその存在を認めていただけており、訓練時だけではなくリーダーの研修などの行事もバックアップしてくれています。また、「リーダーには男女関係なく、適切な人になるべきである」としっかり背中を押していただいているので、女性が活躍しやすい雰囲気です。

地域の防災計画の策定には、事務局として仙台地域防災リーダーが関わっており、遠慮なく意見を出し合っています。

仙台地域防災リーダーは、祭りなどでも積極的に参加して顔を覚えてもらうようにしています。

普段からよく知っている間柄だからこそ、意見も聞いてもらえるし、避難所での指示も聞いてもらえると感じています。

【妊産婦・乳幼児の避難に関して、難しいと感じているところ、課題だと感じていること】

今、乳幼児を抱えているお母さんたちは、実は「子どもを抱えた震災」を知りません。

家の流失や全壊がなくとも、家具が倒れて部屋の中が散乱し、小さな子どもを抱えて生活することができなくなります。特にアパートやマンションなどの集合住宅では、タンスなどが倒れると片づけるスペースがなく、避難せざるをえない状況だったそうです。

しかし、避難所である学校の体育館には大勢の人が押し寄せ、狭く慣れない場所に閉じ込められた子どもたちは、情緒不安定になり、泣いたり騒いだりすることも多く、具合を悪くする子もいました。お母さんたちは自分の子どもだけでなく周囲にも気を遣わなくてはならず、眠れない日々が続いていたようです。

そういった事態になることを、今幼い子どもを子育て中のお母さんは知らないのです。

当時を振り返って、「子どもを抱えて誰に声かけしていいかわからなかった」という声も聞かれます。そういうときに、地域でお母さんを支えられるようにしていかなければならないと考えています。

たとえば、子育てサークルで知り合った母親たちが連絡を取り合い、数家族が一か所に集まって避難しているケースがありました。皆で炊き出しや買い物をして、日中はそれぞれの家の片づけをするといったように、支え合いながら落ち着くまで過ごしたようです。子どもたちも、お友達ファミリーと過ごすのは安心感を持ってたようです。

しかしながら、こうした「共助」は、日ごろから連携が取れていなければ難しく、多くの子育て世帯が避難所で過ごすことになります。

子育て世帯が困っているときに、気兼ねなく声をあげられるような、避難所の体制が重要だと思います。

【地域でのこれからの取り組み】

第三回国連防災世界会議が仙台市で開催された際、総理大臣にスピーチの中で防災宣言について取り上げていただいたおかげで、子育て期のお母さん方の思いが世界とつながったのではないかと感じました。

これからは、この宣言に込められた思いを広げていく、そのつなぎ役・コーディネイト役をしていくのが、先輩ママや地域の役割だと思っています。

地域の中では、サークルなど母親たちの集まりに、仙台地域防災リーダーが出向いて話をすることや、遊びながら学べる「防災かるた」を活用して、多世代に輪を広げる活動に取り組んでいきたいと考えています。

そして何より、普段から地域の中で、顔が見える関係づくりを強化していくことが、今一番心がけていることです。

各地域の取り組み ～公的機関との協定と、女性も企画し子どもと 一緒に取り組む防災訓練【高森東地区】～

【泉パークタウンと宮城大との協定】

平成26年9月に、泉パークタウン町内会・自治会連絡協議会与宮城大学の間で、大規模災害時に大学施設の一部を開放する協定を結びました。これは、住民からの要請に対し大学が応えたもので、国公立大学と住民組織の災害協定は全国で初めての試みとなります。

震災時、足を怪我して避難所に運ばれてきた女性の方が、なかなか病院に受け入れてもらえずご苦労されたということがありました。

そうした避難所での生活が難しい方々が、看護学部の実習用の施設のベッドと和室を緊急避難として使用できるようになり、妊産婦・乳幼児親子にとっても、心強いことだと考えています。

【小中学生が防災訓練に参加】

震災後、高森中学校区の小中学校では「すこボラ隊」（少しだけボランティア）の子どもたちが、地域行事や様々な場面で活動しています。

高森東地区の防災訓練でも毎年、高森東小、高森中学校の「すこボラ隊」の子どもたちが活躍しています。

中学生は避難所設営や炊き出し釜の設置、プールの水くみなどの力仕事を手伝い、小学生は炊き出しのおにぎり作りや小さな子ども相手に絵本を読み聞かせたり、地域の活動を新聞にまとめたりする活動を行いました。

仙台市地域防災リーダー（SBL）が、児童センターでの親子防災教室や、市民センター主催の小中学生と地域の方々対象の避難所ワークショップ、中学校での防災減災ワークショップの授業などに取り組み、子どもたちに災害時に自分たちは地域で何ができるか、今地域で何をすべきかを考えてもらった結果、平成27年度はたくさんの「すこボラ隊」の子どもたちが防災訓練に参加しました。

また、防災訓練のときに、妊婦役と介助役、歩行困難で車いす使用の方と介助役の方という役割を割り当てて訓練を実施した町内会もありました。

今後は中学生にも避難時に支援が必要な方々への援助活動などに参画してもらえる場を作っていけたらと思っています。



▲炊き出しを手伝うすこボラ隊

【婦人防火クラブが防災に関する提案を実施】

高森東地区では地域の避難所運営マニュアルの中で、婦人防火クラブが食料物資班に位置づけられています。避難所で女性が必要とするもの、妊産婦や乳幼児に必要なものを調達するときに、女性の視点できめ細やかに対応できると考えています。

防災訓練では、婦人防火クラブは炊き出しだけではなく保存食を使った避難時の食事を提案する展示スペースも企画しています。これは、「避難所に来れば炊き出しの食事をもらえる」と備蓄を怠るのではなく、まずは『自助』ということを伝えるためです。ポリ袋を使ってお米を炊く方法や、普段の生活の中で備蓄できる切り干し大根を使ったメニューなど様々な災害時の食に関しての提案をしてみました。

食に関するだけでなく、日ごろからできる備えとして防災グッズの展示や、泉消防署高森出張所のご協力のもと、家具転倒防止や住宅用火災報知器の啓発展示も行っています。



▲備蓄できる食品を活用したメニューの提案

【妊産婦・乳幼児に関して、難しいと感じているところ、課題だと感じていること】

毎年いろいろな工夫をしている防災訓練ですが、残念ながら妊産婦や乳幼児を含め、子育て世代の家庭の参加はまだまだ少ない状況です。しかし災害時には特に支援を必要としている子育て世代にこそ『自助』『共助』の大切さをもっとわかっただけでいいと思っています。

そのためには乳幼児親子が集まる児童センターなどで親子で楽しめる防災講座を企画し、普段の生活の中に防災・減災の視点を入れ、日常生活の中で無理なく災害に備える準備や工夫等ができることを伝えたり、防災訓練や地域行事への参加について積極的に呼びかけていくことなどを考えています。

【地域でのこれからの取り組み】

高森東地区は高齢化が進む中、これからの地域の担い手として若い世代にどのように地域活動に参加していただくかが課題です。

今年度の防災訓練の振り返りでは、来年度は子どもたちにもっと地域で活躍してもらおうという話になっており、そのために地域の大人たちはどう協力できるかを考えていく予定です。